埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第108集

深谷城跡（第13次）

2009.8

深谷市教育委員会

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第108集

深谷城跡（第13次）

2009.8

深谷市教育委員会

序

このたび、深谷市教育委員会では、「深谷城跡（第13次）」の発掘調査報告書を刊行するはこびとなりました。

深谷城跡は、深谷の礎を築いた深谷上杉氏の居城で、湿地帯を利用した大規模な要害でした。江戸時代の初めに廃城となりましたが、地割りや水路などに往時の姿を残しています。近年の発掘調査では、障子堀という特殊な堀や、井戸の跡などが多数確認され、その実態が徐々に明らかになってきました。今回の調査は、城跡全体から見れば極めてわずかな部分にも関わらず、整地跡や溝、井戸跡の確認という成果を挙げることができました。

現在、深谷市には旧石器・縄文時代から近現代までの様々な遺跡が残されています。こうした遺跡は、一度消滅すると二度と見ることのできないものであり、これを保護し、後世に伝えていくことは私たちの大きな課題です。今回の発掘調査の成果を報告書というかたちにまとめ、広く市民の皆様にご紹介することで、郷土の歴史の古さやその優れた文化について、ご理解を深めていただきたいと存じます。また、この報告書が学術研究はもとより、学校、社会教育などの生涯学習活動を通じて、皆様が歴史を考えるための資料として役立てば、望外の喜びです。

今回の発掘調査および報告書作成にあたり深いご理解とご協力をいただきました関係者の皆様に心から感謝を申し上げまして序にかえます。

平成21年８月

深谷市教育委員会
教育長　　猪　野　幸　男

例　　言

1．本書は、埼玉県深谷市仲町716-2、717-6における車庫建設工事に伴う遺跡発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、深谷市教育委員会が主体となり、調査費用は、深谷市が負担した。

3．発掘調査期間は、平成21年２月13日～平成21年３月２日である。

4．発掘調査及び出土遺物の整理、報告書の執筆は知久裕昭が担当した。

5．遺跡の基準点測量及び遺構測量は、株式会社東京航業研究所に委託した。

6．出土遺物は、深谷市教育委員会が保管している。

7．発掘調査および報告書の作成にあたっては、次の諸氏から数々のご指導ご助言を賜った。
　青木克尚　　古池晋禄　　富田和夫　　永井智教　　松田　哲　　（敬称略）

凡　　例

1．遺跡原点は、国家方眼座標Ｘ＝21745.000、Ｙ＝－49030.000である。また、各遺構図における方位指示は、全て座標北を示している。

2．遺物観察表の記載は、以下のとおりである。
　・計測値の単位はcmである。
　・器径、器高で（　）を付したものは推定値を表す。
　・胎土は、肉眼で確認できた範囲での含有物を、以下のアルファベットで表した。
　　A…白色粒子、B…赤色粒子、C…黒色粒子、D…石英、E…角閃石、F…片岩
　　G…白色針状物質、H…砂礫、I…雲母

3．遺物の注記、および原図における遺構の略号は、次のとおりである。
　溝…ＳＤ、井戸…ＳＥ

4．遺構・遺物実測図の縮尺は、適宜スケールで示した。

5．土層説明中の色調については、『新版標準土色帖』によった。

発掘調査の組織

発掘調査（平成20年度）

調査主体者	深谷市教育委員会	教育長	猪野　幸男
		教育次長	石田　文雄
		次　長	中村　信雄
事務局	深谷市教育委員会生涯学習課	課　長	澤出　晃越
		課長補佐	吉場　厚仁
		文化財保護係長	鳥羽　政之
		主　査	森下昌市郎
		主　査	宮本　直樹
		主　任	荻野　直美
		主　任	知久　裕昭
		主　事	幾島　審
		臨時職員	栗原貴世実

報告書刊行（平成21年度）

調査主体者	深谷市教育委員会	教育長	猪野　幸男
		教育次長	石田　文雄
		次　長	島崎　保
事務局	深谷市教育委員会生涯学習課	課　長	澤出　晃越
		課長補佐	吉場　厚仁
		文化財保護係長	村松　篤
		主　査	宮本　直樹
		主　任	荻野　直美
		主　任	知久　裕昭
		主　事	幾島　審
		主事補	飯島　峻輔

目　次

序

例言

発掘調査の組織

Ⅰ　発掘調査の経過 …… 1
　1　発掘調査に至る経過 …… 1
　2　発掘調査の経過 …… 1

Ⅱ　深谷市の地理的環境と周辺遺跡の様相 …… 2

Ⅲ　遺構と遺物 …… 5
　1　概要 …… 5
　2　溝 …… 5
　3　井戸 …… 5

Ⅳ　調査のまとめ …… 9

報告書抄録

挿図目次

第１図　深谷城跡及び周辺の遺跡分布図……　３
第２図　深谷城跡の位置と発掘調査区……　４
第３図　深谷城跡第13次調査区全体測量図……　６
第４図　土層断面図……　７
第５図　出土遺物……　８
第６図　深谷城跡全体図……　10

表目次

第１表　深谷城跡及び周辺の遺跡一覧表……　３

図版目次

図版１　調査区全景－１（東から）　調査区全景－２（南西から）　調査区全景－３（南東から）
図版２　調査区全景－４（南西から）　調査区土層断面（南東から）　調査区東部土層断面
図版３　第１号溝　第１号溝・第１号井戸土層断面　第１号井戸(1)
図版４　第１号井戸(2)　第２号溝　第２号溝土層断面
図版５　調査風景　第１号溝出土遺物　第１号井戸出土遺物(1)
図版６　第１号井戸出土遺物(2)　第１号井戸出土遺物(3)　第１号井戸出土遺物(4)

Ⅰ　発掘調査の経過

1　発掘調査に至る経過

深谷市は、埼玉県北部に位置し、北を群馬県との境に接する。平成18年１月１日に旧岡部町、旧川本町、旧花園町と合併し、総面積137.58㎢、人口約146,500人となった。当地は農業、工業ともに盛んで、深谷ネギの産地としても有名である。歴史的にも、後期旧石器・縄文・弥生・古墳時代を始め、幡羅郡家や榛沢郡家が造られそれぞれ郡の中心として機能していた奈良・平安時代、また百済木遺跡で豪族が居宅を営んだ奈良時代、深谷上杉氏の拠点であった室町・戦国時代、宿場町として栄えた江戸時代、そして近・現代まで多くの遺跡、文化財が残される。鎌倉時代の有力御家人であった畠山重忠の本拠地として、或いは近代日本経済界を築いた渋沢栄一の生地としても良く知られる。

深谷城跡は、ＪＲ深谷駅より北へ約920ｍ、櫛挽台地先端から妻沼低地にかけて立地する。標高は約35ｍである。遺跡の範囲は、古地図や地割から、南北約600ｍ、東西約500ｍの範囲に広がり、面積は約19.8haと推定される。

関東管領家の一族である深谷上杉氏の居城とされ、埼玉県の旧跡に指定されている。これまでに深谷市教育委員会により12度、埼玉県埋蔵文化財調査事業団により１度の調査が行なわれている。これまでの調査で、掘立柱建物跡や板塀跡、井戸、堀、土塁等の遺構が確認されている。堀の一部は、大規模な障子堀である。また、平安時代の掘立柱建物跡や溝も確認されている。そのため、深谷市教育委員会では、深谷城跡周辺で事前調査等を行ってきた。

平成20年10月３日、深谷城跡地内の深谷市仲町716-2、717-6で深谷市消防団第１分団車庫建設工事の実施が明らかとなった。深谷市教育委員会は施工主である深谷市消防本部との協議を経て、平成20年10月20日に当該地の確認調査を実施した。調査の結果、溝等の遺構や土器が検出された。この結果を踏まえ、発掘調査の実施について、市教育委員会と市消防本部とで協議を行い、工事により埋蔵文化財に影響が及ぶ範囲について、市教育委員会が主体となって発掘調査を実施することで合意した。

市教育委員会は直ちに、文化財保護法第99条の規定に基づき、埋蔵文化財発掘調査通知（平成21年２月３日付深教生発第763号）を提出し、準備に入った。なお、埼玉県教育委員会教育長から、平成21年２月23日付教生文第4-1040号で指示通知を受けた。

2　発掘調査の経過

深谷市消防団第１分団車庫建設工事に伴う、深谷城跡第13次発掘調査の経過は、概ね以下の通りである。

２月13日㈮　表土剥ぎ。
２月17日㈫　遺構を重機及び人力にて掘削し、ほぼ完掘。
２月18日㈬　遺物を取り上げ。写真撮影。土層注記。
２月25日㈬　遺構測量。
３月２日㈪　埋め戻し。

全体の調査面積は32㎡であり、溝２条、井戸１基が確認された。調査面積が狭小で、また現地表面から確認面までの深さがあることから、作業員にはよらず、ほぼ重機による掘り下げを行なった。その後、人力により壁面、底面精査、及び土層断面の観察を行なった。遺構測量後、しばらく悪天候が続いたため、埋め戻しを見合わせることになった。わずか数日の調査であったが、溝、井戸の他に、調査区全体に整地が行なわれていることを確認することができた。

今回の発掘調査を行うにあたり、深いご理解とご協力をいただいた方々をはじめ、この文化遺産を記録保存し、後世に伝える作業のためにご協力いただいた全ての方々に敬意を表する。

II　深谷市の地理的環境と周辺遺跡の様相

深谷市の地形を概観すると、東西に走るＪＲ高崎線付近を境として、南側に櫛挽台地が広がり北側には妻沼低地が形成されている。櫛挽台地は荒川によって作られた古い扇状地が浸食されてできた沖積台地で、寄居付近を頂部としている。妻沼低地は、利根川の自然堤防及び沖積低地であり、加須低地と並び利根川の中流低地の一つに数えられる。

櫛挽台地は構造的には、北西側の武蔵野面に比定される櫛挽面（櫛挽段丘）と、南東側の立川面に比定される寄居面（御稜威ヶ原段丘）とで段丘状に形成されている。櫛挽面はほぼＪＲ高崎線沿いの崖線で比高差５～10mをもって妻沼低地と接しているが、寄居面は高崎線より北へ1.5～1.8kmほど延びていて、比高差２～５mをもって妻沼低地と接している。接線付近での標高は櫛挽面が40～50m、寄居面が32～36m、妻沼低地が30～31mである。櫛挽面は標高70m付近より発する上唐沢川、押切川、戸田川、唐沢川等が北流していて、櫛挽面北端部は南北に台地を開析する浅い谷が発達したものと考えられる。発掘調査で埋没谷が検出されることも多い。また、先端部には所謂先端湧水と認められる池等もある。寄居面にはこうした谷筋はほとんど認められず、妻沼低地と接する台地先端部を除き、水利上は生活に不向きだったと考えられる。

妻沼低地は、利根川右岸に広がる肥沃な低地である。南は熊谷市付近を境として秩父山塊に連なる丘陵や台地と大宮台地に挟まれた荒川低地に続き、東は加須低地に接する。妻沼低地の南端に櫛挽面、東に寄居面を控える一角に深谷市の中心部があり、周辺では住宅地が増加している。妻沼低地は現在ではかなり平坦であるが、利根川の氾濫や流路の変遷等により、自然堤防が発達したものと考えられる。

深谷市内で確認されている旧石器時代の遺跡は多くはないが、荒川右岸の江南台地上には、細石刃や彫刻刀形石器が出土した白草遺跡等がある。旧深谷市域では旧石器はほとんど出土しておらず、西大沼の花小路遺跡と東方の幡羅遺跡で出土したナイフ形石器２点のみである。

縄文時代では、台地の先端部に当たる東方城跡で草創期の可能性がある尖頭器が出土している。また、上野台の小台遺跡からは、早期押型文土器や前期黒浜式土器、諸磯式土器の破片が出土している。上野台の割山遺跡からも、諸磯ａ式土器が多く出土する。

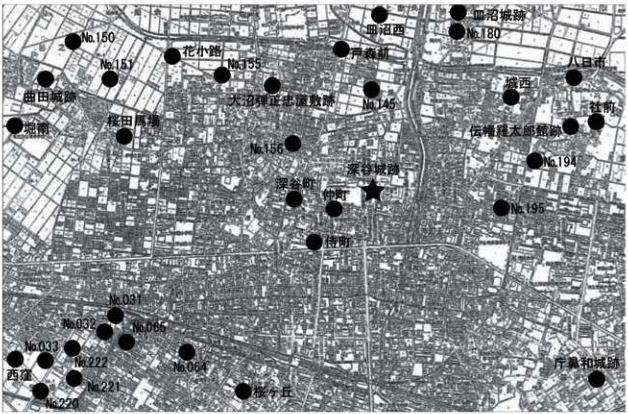
縄文中期、特に後半になると遺跡数やその規模は増大する。小台遺跡は、多量の土器や石器を包含する埋没谷を中心に住居や土坑群が展開する。遺構は中期中葉～後期前葉までのものがこれまでに検出されている。小台遺跡と時期的に重なる遺跡は数多く、小河川を挟んで小集落が多数分布していたか、集落が移動していたものと思われる。

縄文後・晩期になると、生活域の中心は櫛挽台地から妻沼低地へと移っていく。上敷免遺跡では、包含層から在地の後・晩期の資料に混じり、東海系条痕文土器が検出されたり、埼玉県では初の遠賀川系の壺が検出されるなど、他地域との交流を考えさせられる。

弥生時代に入ると、上敷免遺跡で中期の再葬墓と、住居跡が確認されている。また、上敷免森下遺跡で中期の再葬墓、宮ヶ谷戸遺跡で中期の住居跡が確認されている。岡の四十坂遺跡も該期の代表的な遺跡である。

古墳時代前・中期の集落は、森下遺跡や下手計西浦遺跡、皿沼西遺跡等で確認されており、当該地での調査例が増加しつつある。古墳時代後期前半になると遺跡数は爆発的に増加し、妻沼低地の自然堤防上に大規模な集落が営まれる。この時期に小規模な円墳が数多く造られるようになり、櫛挽台地の先端部に形成される木の本古墳群や白山古墳群等の古墳群が形成される。

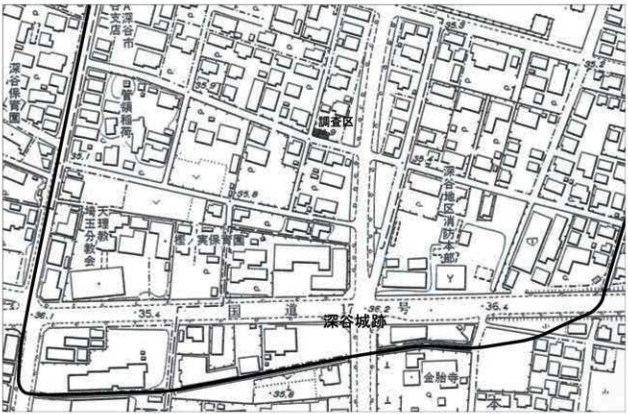
７世紀頃には上敷免遺跡等それまでの大集落は縮小傾向になり、代わって宮ヶ谷戸遺跡や東川端遺跡、清水上遺跡等、幡羅郡家と推定される幡羅遺跡に近い位



第１図　深谷城跡及び周辺の遺跡分布図（１／20,000）

遺跡名称	時　　代	遺跡名称	時　　代
深谷城跡	古墳前期、平安、中世、近世	桜ヶ丘	弥生中期、古墳後期～平安
曲田城跡	中世	No.031	古墳
桜田馬場	中世	No.032	縄文中期
堀南	縄文前期、古墳前期・後期～平安	No.033	古墳後期～平安
花小路	古墳後期	No.064	縄文中期
大沼弾正忠屋敷跡	中世	No.065	古墳後期～平安
深谷町	縄文中期・後期、古墳中期	No.145	古墳後期～平安
仲町	縄文後期	No.150	縄文後期、古墳後期～平安
待町	中世	No.151	古墳後期～平安
皿沼城跡	中世	No.155	縄文中期・後期、古墳後期～平安
皿沼西	縄文後期、弥生、古墳前・中期、平安	No.156	縄文、古墳後期～平安
戸森前	古墳前期・中期・後期、奈良、平安	No.180	弥生中期、古墳後期～平安
城西	縄文前期・中期、古墳後期～平安	No.194	古墳後期
八日市	縄文後期、古墳後期～平安、中世	No.195	古墳後期
伝幡羅太郎館跡	中世	No.220	縄文前期・中期
社前	縄文前期・中期、古墳後期～平安	No.221	弥生中期
庁鼻和城跡	中世	No.222	縄文
西窯	縄文前期		

第１表　深谷城跡及び周辺の遺跡一覧表



第２図　深谷城跡の位置と発掘調査区（１／２,５００）

置の集落規模が拡大する。律令期には、深谷市の東部は幡羅郡、西部は榛沢郡、南部は男衾郡に属すると考えられる。榛沢郡の郡家正倉跡は岡の中宿遺跡で発見されている。幡羅郡家跡である東方の幡羅遺跡は、正倉や館等の遺構がこれまでに確認され、更にその範囲、内容を確認するための調査が継続中である。また、新屋敷東遺跡からは、正倉別院の可能性のある大型建物跡が検出されている。

平安時代には、深谷城跡、堀南遺跡、花小路遺跡等、台地の先端部に新たに集落が営まれるようになる。これらの集落は、榛沢郡と幡羅郡を結ぶ水路の可能性が指摘される福川の流域に位置する。

平安時代末期以降は、猪俣党武士団の居館が各地に出現する。代表的なのは、県指定史跡にもなっている人見館跡である。それに近接する吹張遺跡でも、館等の施設跡が検出されている。また、鎌倉街道上道の跡が、旧川本町域から旧花園町域に残る。そして室町時代以降は深谷上杉氏の本拠地となる。深谷上杉氏は、当初庁鼻和城に居を構えたと言われるが、５代目房憲の時に、古河公方勢力との戦闘に備え、より堅固な深谷城に移ったとされる。深谷城跡の北東約１kmには、深谷上杉氏の宿老岡谷香丹が築いたと言われる皿沼城跡があり、北方の守りを堅固なものにしている。また、香丹が隠居後に移ったとされる曲田城跡が北西にある。東に約３kmの台地の先端部には東方城跡がある。周辺には他に家臣の館が分布していたと思われ、南方約1.8kmには、家臣の館跡である秋元氏館跡、南西約2.8kmには、古河公方勢力を牽制し人見地域を防衛するために築かれたと考えられる館跡が検出された押切遺跡が存在する。また、割山西遺跡では、伝承等が一切残っていないが、方形の区画溝が検出され、館跡と考えられている。仙元山南麓の押切遺跡西隣に位置する昌福寺は、房憲が創建したとされる。

江戸時代になると、深谷城は程なく廃城となり、深谷の大部分は天領となる。また、岡部には岡部藩があり、陣屋が構えられた。

Ⅲ　遺構と遺物

1　概要

今回の調査で確認された遺構は、溝２条、井戸１基である。また、調査区及びその周辺に整地が行なわれた痕跡が確認された。各遺構は整地層を掘り込んで構築される。なお、現地表面から整地層上面までの深さは約0.7m、整地層下面の黄褐色粘質土までの深さは約1.4mである。

2　溝

第１号溝（第３・４図、第５図１～５）

調査区中央やや西寄りを南北に走る。整地層を掘り込み、第１号井戸に切られる。地山の面では、幅1.3m、底面までの深さ50cmを測り、底面はほぼ平坦である。

調査区壁面から、掘り込みは整地層の上面からであることが分かり、本来の掘り込みの深さは1.3m、壁は斜めに立ち上がり、上端の幅は約４mを測る。上端部付近には、両岸に杭のようなものが設置されていたことが、調査区壁面から推定される。

図示できた遺物は、第５図１～５である。１は縄文土器である。横位の沈線が認められ、称名寺式と思われる。２はカワラケである。推定口径10.6cmを測り、胎土に白・赤・黒色粒、角閃石を含む。焼成は普通で、色調は橙色を呈する。残存率は20％である。３は陶器の鉢であろう。横位の沈線が３条認められ、灰黄褐色の釉が内外面にかかる。胎土に白・赤・黒色粒、石英を含む。焼成は普通である。４は軟質の内耳鍋である。胎土に白・赤・黒色粒、雲母を含む。焼成は普通で、色調は黒褐色を呈する。５は瓦質の鍋であろう。胎土に白・黒色粒を含む。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。底面に二重弧文が施される。

第２号溝（第３・４図）

調査区西端部を南北に走る。整地層及び第１号溝を掘り込んでいる。地山の面では、幅1.7m、底面までの深さは５cm程度である。

調査区壁面から、掘り込みは整地層の上面からであり、本来の掘り込みの深さは約１mである。壁は斜めに立ち上がり、溝の中心部分から推定すると、上端の幅は２～３mである。

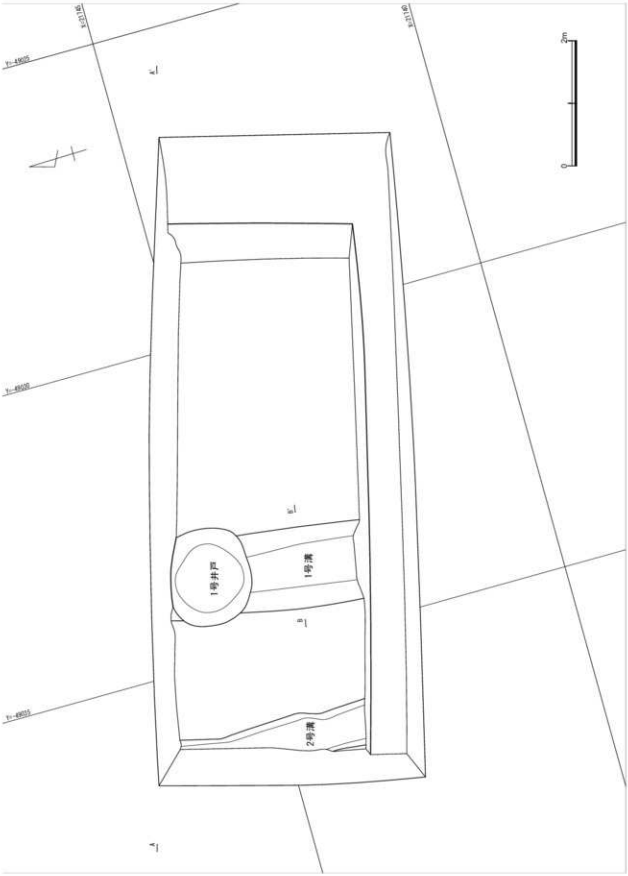
図示できる遺物は出土しなかった。

3　井戸

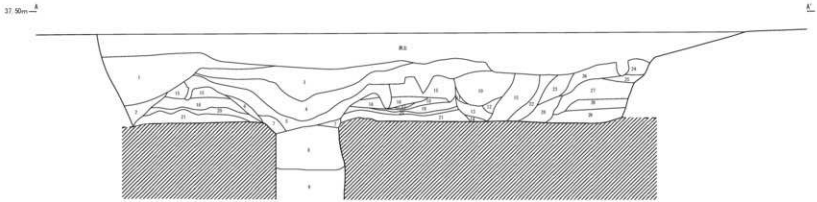
第１号井戸（第３・４図、第５図６～９）

調査区北壁際で確認された。直径1.3～1.5mの円形で、素掘りの井戸である。整地層や第１号溝を切る。壁面は一部がややオーバーハングしている。地山の面から約1.2m掘り下げたが、ボーリングの結果、更に１m以上の深さがあることが分かった。湧水もあり、危険回避のため、底面までの掘削を断念した。

図示できた遺物は、第５図６～９である。６は緑泥片岩製の板碑である。残存部には、立像の仏菩薩が２体、線刻により描かれている。７・８は石臼である。７は安山岩製で、裏面は皿状に凹んでいる。８は安山岩製で、使用面には放射状の線刻が施される。９は木製品で、板状部材である。長さは27cm以上、幅は７cm以上、厚さは１cmを測る。径６mmの孔が穿たれる。他に、自然木が１点出土した（写真図版６参照）。



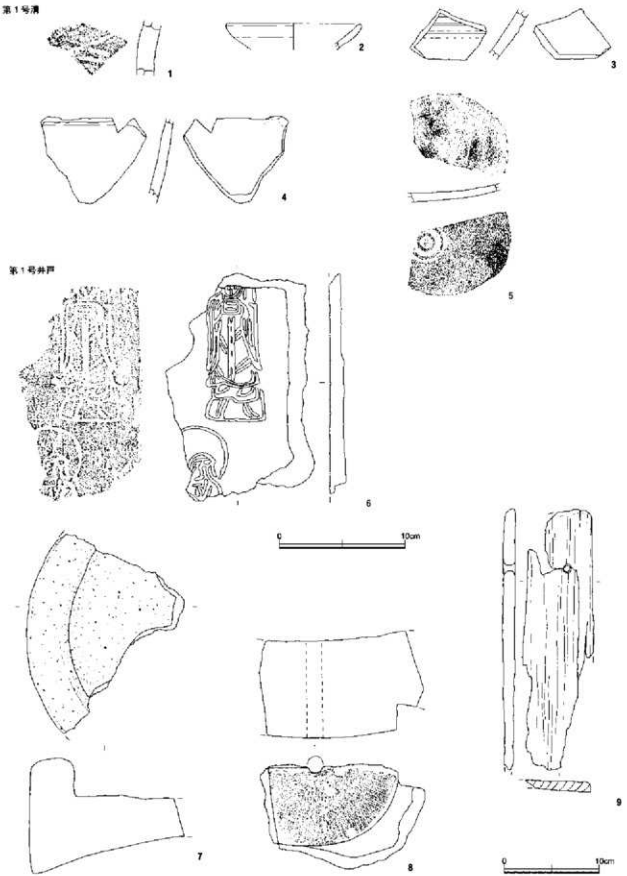
第３図　深谷城跡第13次調査区全体測量図



1層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　礫(1～5cm)を多量に含む。(2号溝)
2層　黒褐色土　（10YR3/1）　炭化粒を少し含む。礫を含む。(2号溝)
3層　灰黄褐色土　（10YR4/2）　ローム粒・鉄土粒・白色粒・礫を含む。(1号溝)
4層　黒褐色土　（10YR2/2）　ローム粒土粒を含む。(1号溝)
5層　黒色土　（10YR2/1）　ローム粒を多く含む。(1号溝)
6層　黒褐色土　（10YR2/1）　ローム粒・ブロック(1～5cm)を多量に含む。(1号溝)
7層　黒褐色土　（10YR3/2）　ローム粒・酸化鉄粒を多く含む。(1号溝)
8層　黒褐色土　（10YR3/1）　ローム粒・粘土ブロック(1～3cm)を多く含む。(1号井戸)
9層　黒色土　（10YR2/1）　ローム粒・粘土ブロック(1cm)を少し含む。(1号井戸)
10層　黒色土　（10YR2/1）　ローム粒を少し含む。
11層　明黄褐色土　（10YR7/6）　粘土で構成される。
12層　黒色土　（10YR2/1）　ローム粒・ブロック(3～5cm)を多く含む。
13層　黒色土　（10YR2/1）　ローム粒を含む。
14層　黒色土　（10YR2/1）　ローム粒・ブロック(3～5cm)を多く含む。
15層　明黄褐色土　（10YR7/6）　粘土で構成される。
16層　灰黄褐色土　（10YR4/2）　ローム粒を多く含む。
17層　黒褐色土　（10YR3/2）　ローム粒をわずかに含む。
18層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ローム粒を多く含む。
19層　灰黄褐色土　（10YR4/2）　ローム粒を少し含む。
20層　黒褐色土　（10YR3/6）　ローム粒を多く含む。
21層　灰黄褐色土　（10YR4/2）　ローム粒を少し含む。
22層　暗褐色土　（10YR3/3）　ローム粒を少し含む。
23層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ローム粒を多く含む。
24層　黒褐色土　（10YR3/1）　ローム粒を多く含む。
25層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ローム粒を多く含む。
26層　黒褐色土　（10YR3/2）　ローム粒・ブロック(1～3cm)を多く含む。
27層　明黄褐色土　（10YR7/6）　粘土で構成される。
28層　黒褐色土　（10YR3/2）　ローム粒を含む。
29層　灰黄褐色土　（10YR4/2）　ローム粒を含む。

0　2m

第4図　土層断面図



第5図　出土遺物

Ⅳ　調査のまとめ

前章まで述べてきた通り、今回の調査では溝２条、井戸１基が確認された。19.8haに及ぶ広大な深谷城跡の中では極めて微々たる範囲ではあるが、この成果を加えて、深谷城の全体像を見直してみたい。

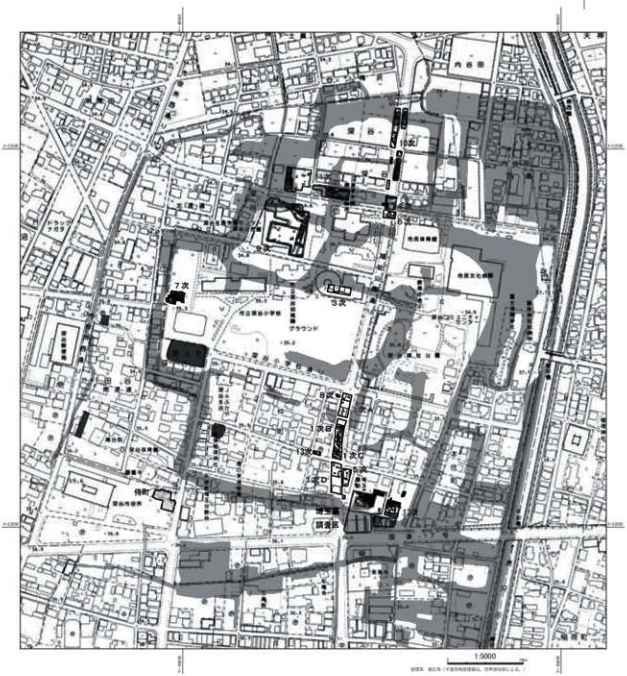
第６図は、明治時代の地籍図から水路・池・田の範囲と、現在残る土塁状の遺構、そして発掘調査地点を示したものである（知久2002から作成）。深谷城は江戸時代の初めの1626年に廃城となり、1692年以降は城跡地の開墾が許される。そして堀の大部分は、水路・池・田といった形で痕跡を残したものと考えられる。事実、城の北側や南端、西端部において、堀の痕跡とほぼ重なって堀が確認されている。しかしこの場合、あくまで最終段階のもので、かつ大規模なものが痕跡を残す可能性が高いといえる。なお、城の北側で確認された堀は、ほとんどが障子堀である。現在までのところ、他の区域より障子堀は確認されていない。

今回の調査で確認された溝は、位置的には曲輪を区画するものではなく、その内部に走るもので、比較的小規模なものとみられる。第１号溝から第２号溝へと、ほぼ踏襲する位置や方位で変遷をしており、城の新しい段階まで溝は継続していたであろう。興味深いのは、調査区全体に約80cmの厚さの整地が認められたことである。古い小字名が「東土手」の場所に当たり、周囲には櫛状に連なる堀の痕跡が認められる。主郭の南側を守る位置においても、当然のことながら、大規模かつ複雑な造成が行なわれていたことを示す。今後、この周辺においては、整地層が存在する可能性も念頭に置いて調査する必要があろう。

最後に改めて、この発掘調査に深いご理解とご協力を頂いた方々をはじめ、深谷城跡の発掘作業、整理作業に携わり、文化財を記録保存して後世に残すことにご尽力頂いた皆様に敬意を表したい。

〈参考文献〉

青木克尚他　1996　『深谷城跡（第４次）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第49集
青木克尚他　1997　『深谷城跡（第５次）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第51集
青木克尚他　1997　『深谷城跡（第６次）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第52集
澤出晃越　1987　『深谷城跡』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集
澤出晃越　1991　『深谷城跡（第３次）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第27集
知久裕昭　2002　『深谷城の再検討』『埼玉考古』第37号　埼玉考古学会
知久裕昭　2004　『深谷城跡（第７次）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第69集
知久裕昭　2004　『侍町遺跡』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第70集
永井智教他　2006　『深谷城跡（第８～11次）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第77集
宮本直樹　2009　『深谷城跡（第12次）』埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第107集



：水路、池、田の範囲

：現在残る土塁状遺構

第６図　深谷城跡全体図

写 真 図 版

図版１

調査区全景－１（東から）

調査区全景－２（南西から）

調査区全景－３（南東から）

図版２

調査区全景－４（南西から）

調査区土層断面（南東から）

調査区東部土層断面

第１号溝

第１号溝・第１号井戸土層断面

第１号井戸(1)

図版４

第１号井戸(2)

第２号溝

第２号溝土層断面

調査風景

第１号溝出土遺物

第１号井戸出土遺物(1)

図版６

第１号井戸出土遺物(2)

第１号井戸出土遺物(3)

第１号井戸出土遺物(4)

報告書抄録

ふりがな	ふかやじょうせき（だい13じ）
書名	深谷城跡（第13次）
副書名	
巻次	
シリーズ名	埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第108集
編著者名	知久裕昭
編集機関	深谷市教育委員会
所在地	〒366－0823　埼玉県深谷市本住町17－3　　TEL　048－572－9581
発行年月日	2009（平成21）年8月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯 （°′″）	東経 （°′″）	調査期間	調査面積	調査原因
深谷城跡（ふかやじょうせき）	深谷市仲町（ふかやしなかちょう） 716-2,717-6	11218	108	36　19　79	139　28　48	20090213 ～ 20090302	32㎡	車庫建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
深谷城跡	城跡	中世	溝　2条 井戸　1基	縄文土器 中世土器 陶器 板碑 石臼 木製品	

埼玉県深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書　第108集

深 谷 城 跡（第 13 次）

印　刷　　平成21年８月27日
発　行　　平成21年８月31日
発　行　　埼 玉 県 深 谷 市 教 育 委 員 会